

「文明開化期のちりめん本と浮世絵」

5月21日(月)～28日(月) 日曜日も開館 午前10時～午後6時

会場 京都外国語大学国際交流会館6階ユニバーシティギャラリー

の嫁入り^{よめいり}、『瘤取^{こぶとり}』、『浦島^{うらしま}』、『八頭の大蛇^{やまたのおろち}』、『松山鏡^{まつやまのかがみ}』、『因幡の白兔^{いなばのうたぎ}』、『野干の手柄^{のくちのてがら}』、『海月^{うみづき}』、『玉の井^{たまのい}』、『俵藤太^{たわらとうた}』、『鉢かづき』、『文福茶釜^{ぶんぷくわく}』、『竹籠太郎^{たけかごたろう}』、『羅生門』、『大江山』、『養老の瀧』など、全部で21種類の伝承文学が翻訳されています。その後もこの「日本昔噺」シリーズは「番外」や「第2シリーズ」として、『竹取物語』、『三つの顔』などがあり、中にはラフカディオ・ハーンの『猫を描いた少年』や『ちんちん小袴』、『若返りの泉』、『蜘蛛』、『団子をなくした婆』などの自作作品、またT.H.ジェイムズ夫人による『思い出草と忘れ草』、『不思議の小槌』、『壊れた像』など、翻訳に慣れた外国人が日本の昔話風に創った物語もありました。



「日本昔噺」シリーズの一部(本学図書館所蔵)

さらに、武次郎はこうした伝承文学だけでなく、日本の文化を特出した作品も外国人に書かせてちりめん本で刊行しています。これには『子どもの日本』、『みつの一』、『日本の小唄』、『絵でみる日本の人々の生活』、『日本の咄家』、『さかさまの国日本』、『日本の芝居 寺子屋と朝顔』、『小花三』、『おゆちゃさん』、『東の国からの詩の挨拶』、『詩集 刀と花』など、日本の文化を様々な角度から捉えた作品があります。

各国の言語に翻訳して外国で販売

これらの伝承文学や日本文化を取り上げた作品は武次郎の予測どおり、日本に滞在した多くの外国人に愛読され、重版も作られています。また、英語版の他にもフランス語やドイツ語、スペイン語、ポルトガル語などの版も出版されるようになり、これらのちりめん本は外国人が帰国に際し、異国情緒豊かなお土産として持ち帰ることもありました。

さらに、武次郎は横浜に進出していたイギリス

のケリー・アンド・ウォルシュ社やドイツのアーメンク社など外国の書籍会社と提携を結び、海外でちりめん本を販売します。そして、彼のこうした成功はその後、松室八千三や秋山愛三郎など幾つかの同業者を生みます。しかし、いずれも武次郎の業績を上回ることはありませんでした。

やがて、武次郎の事業も次男の西宮与作や長谷川系の人たちに引き継がれて昭和中期まで続き、⁽⁴⁾2百種前後のちりめん本が刊行されました。

ちりめん本刊行が持つ付加価値

武次郎もちりめん本刊行の計画時に強く認識していたことだと思われませんが、この営利事業は少なくとも次の二つの付加価値を持っています。その一つは、ちりめん本が布のような柔らかさの上質和紙を用いたもので、挿絵は浮世絵画法で描かれ、さらに和綴じの製本技術から成る書物であることです。こうした拵えの書物を外国に輸出することは、それ自体が日本の伝統美術や工芸を発信していることとなります。

二つ目は、ちりめん本を媒体として伝承文学と文化を外国語で紹介していることです。これは、当時まだ海外でよく知られていなかった日本、特にこの国の民俗や風俗、習慣が外国人に理解されることに繋がります。

このように大きな価値を含んだちりめん本は、日本の出版業界で洋紙や洋式の印刷、製本が主流になろうとしていた時代に、長谷川武次郎によって「手作りの和本」や「クレープ・ペーパー・ブック」として力強く発信され、多くの外国人の心をつかんでいたのです。

註

- (1)石澤小枝子著『明治の欧文挿絵本 ちりめん本のすべて』215-217頁 三弥井書店 平成16年。
- (2)上田徳三郎口述、志茂太郎筆録『圖解製本』第一葉 名著普及会 昭和54年。
- (3)本書はMacmillan社から出版された *Tales of Old Japan*. 2 vols.である。
- (4)本学図書館には『松山鏡』の昭和32年17版印刷も見られる。

おく まさよし(司書・図書館事務局長兼管理運営課長)